

今地区と周辺の農業用水の慣行

—水は川上から、田植えは川下から—

1 はじめに

今地区とその周辺—昔の御野郡(みのごおり)は、岡山平野の中にあって、水利に恵まれ、肥沃な耕地は米作に適し岡山藩の穀倉であった、稲作に水は欠かせない。水源は旭川であるが、この水を川上・川下共に公平に配分しなければならない。川上の農民が強い権利を持ち、川下は余水を恵まれるのでは、川下の農民は頭が上らない。ただし、そうは言っても、このような形が通例であろう。

しかし、この地方は違う。水の権利は平等でなければならぬと、特異の水利慣行がつくられた。真偽のほどは知らないが、私が父から聞いた話だと、このような水利慣行は、かの熊澤蕃山の配慮であったという。

そこで、この地区の水利の「しきたり」の概要を次に述べることにする。ただし、私は用水関係の実務にたずさわったこともなく、不明のことが多いので、用水関係の経験者の方から指導していただいたことを感謝をこめて申し添えておく。

2 田植えは、川下(平田・田中野田)から

平成4年度 今・芳田・大野地区 用水関番割				平成4年6月12日
月	日	時 間	場	所
6月18日		午後5時	大手(平田・米倉)	
6月18日		午後5時	大手(西長瀬・辰巳・田中)	
6月20日		午後5時	下中野(一の坪・西浦)中仙道(水樋)今村家崎・辰巳(樋の免、曲り堂元)田中(水樋)	
6月22日		午後5時	上中野(樋の元)今村宮の前	
6月22日		午後5時	辻・金丸	

前掲の表は平成4年度の関番割である。田植え時期(当地区では、最近直播栽培が多くなったので田植えはあまり見られないが)この期日と時刻にそれぞれの樋門が締め切られるのである。

この場合用水路の末端の樋門がまず締められ、順次、上流の樋門に移っていくことが示されている。樋門が閉じられると、用水路の水位が上がり自然に田に水が入り田植えができるというわけである。したがって、田植えは、川下から始まって上流の地区へと進

んでいくのである。田植えは、「川上から川下へ」と進むのが一般であるのに、この地区は逆なのである。特異慣行という、所以である。

3 田植え後の用水の管理は、幹線用水路樋門の調節で

下表の関番(せきばん)割を見ていただきたい。左らんに野田・大供・辻とあるのは、今・大野地区関係の幹線用水路にかかる樋門の場所を示しており、期日は、樋門の締められる日程である。(ただし、樋門が締められる時間帯は、期日の前日17時から当日の12時までである。)

この期日以外の日が開樋されていて、5日間のうち2日くらいの割合いで、上流から末端まで直に水が通されてくるわけで「川上はたっぷり水があるが川下は水が無くて困っている」ということの絶対ないように配慮されているのである。(土用・出穂期等の水の管理は別に実施されている。また、大雨等非常の場合は、臨機に取り扱われる。)

平成4年度 用水関番割

野 田	6月19日	6月24日	6月28日	7月3日	7月8日
	7月13日	7月18日	7月22日	7月28日	8月2日
	8月7日	8月12日	8月16日	8月21日	8月27日
	9月1日	9月6日	9月10日	9月15日	9月20日
	9月25日				
大 供	6月20日	6月26日	7月1日	7月6日	7月10日
	7月15日	7月20日	7月26日	7月31日	8月4日
	8月9日	8月14日	8月19日	8月24日	8月29日
	9月3日	9月8日	9月13日	9月18日	9月22日
	9月27日				
辻	6月25日	6月29日	7月4日	7月9日	7月14日
	7月19日	7月23日	7月29日	8月3日	8月8日
	8月13日	8月17日	8月22日	8月28日	9月2日
	9月7日	9月11日	9月16日	9月21日	9月26日

4 越地(こじ)について

用水路に直接沿わないで、田越しに水を受けねばならない田んぼも多かった。このような田を「越地がかり」というが、隣地から田越しに水を受ける権利も守られていた。(いまは、区画整理で道路の側溝から水がはいるので「越地がかり」は大方なくなった。)

5 川下耕作者の義務

用水を末端の水田まで平等に受けられる権利が守られるかわりに、川下耕作者には義務も負わされていた。

即ち、市中の西川までの用水路の「川さらえ」「川掘り」といって田植前5月に行う、「もく(藻)引き」など用水路保全のための労力奉仕である。

6 樋守り

水は命の次に大切なものである。稲作農業にとっては、水は命である。その命の水を操るのが、樋門の番人である「樋守り」である。昔から樋守りの権限は強かったと思われる。しかし苦労も多かったに違いない。最近の後述のように、時代も変わり、責任ばかり負わされる樋守りにはなりてが無いのではないかと思われる。それにしても、永年樋守りをなさっておられる方には、いろいろの思い出をおもちであろうと推察する。

7 余話

(1) 干ばつの思い出

旭川水系に包含される当地区は、豊富な水に恵まれていて、水不足などということは殆ど無かったといってよかろう。ただ、私がこどもの頃、一度だけ、笹ヶ瀬川に設けられている大手の「田中水門」の入口にたくさんの土俵が詰め込まれていて、何も分からない私にはこども心に異様な感じを受けたことを覚えている。今村史によると、大正13年に大干ばつがあったと記されているので、その時のことであったかと、思い出している。

(2) 都市化の進むなかで

近年は旭川上流に大きなダムが建設され、豊富な水量に恵まれて、水の心配は全く無いし、区画整理で用水路も三方コンクリートに改善された。さらに都市化の進展も著しく、広大な水田も少なくなってきた。そして、用水としての水への関心も低下しつつあるのではないかと思われる。むしろ、大雨の場合の浸水や、排水のことの方が、より大きな関心事になっているようで、時代の変化を痛感するのである。

平成5年4月号 第26号
(中 尾 佐之吉)